島根の民話

第七二回

焼き米を食った男・浜田市三隅町芦谷

令和3年12月21日

収録・解説・酒井　董美（ただよし）　イラスト・福本　隆男

語り手　池田重哉さん（大正14年生まれ）
収録・昭和35年2月18日

あらすじ

昔、あるところにたくさんに焼っ米（こめ）を食べる男が二人ほどおりました。それである家へ焼き米つきに雇われました。

焼き米をついてしまったら、そこの主人が、「おまえら、よう焼っ米を食べるけえ、しっかり食べえ」と言った。そして一人の男に、「どのぐらい食べるか」と聞いたら、

「一升ぐらいは食べる」と言うし、もう一人の男は、「二俵食べる」と言う。

「それなら好きなだけ食べえ」と言うと二人は、たいそう喜んで焼っ米を腹いっぱい食べたそうです。そうしたところ、なにしろ焼き米のことなので、とても腹が大きくなって、どうもこうもならんようになったので、一升食べた男は戸口へ出て、干し大根の下げてある縄を腹へ巻いて、その干し大根を一本ずつ取っては腹の周りにどんどん下げて、身体中にそうして帯で巻いても辛くてならんから、うなって寝ていたそうです。

それからもう一人の二俵ほど焼き米を食べた男は、向こうの方にある一反ほどの荒（あ）れ畑（ばたけ）を大三（おおみ）つ鍬（ぐわ）を持って夜明けまでパクリパクリ打ち返し、とうとう一反全部を済まし、また腹が減って、「焼っ米を食べさせてくれんか」と言ったくらい元気になりました。

けれども、もう一人の干し大根を下げた男はどうしたのかと思って行ってみたら、腹が大きくなり、張り切って死んでしまっておったそうです。

解説

筆者が民話収録を始めたばかりのころうかがったばかりのころの話である。

これは昔話というよりは、どちらかというと世間話に分類すればよいように思われる。そしてその中を流れる考えは、怠けることを戒める教訓を秘めているようであるから、そのようにして見れば、昔話の精神に通じるものがあることも確かである。ただ筆者としては残念ながら、その後同類に出会ったことはなかったものである。

語り手の池田重哉さんにこの話の由来を聞けば、益田市匹見町道川で聞いたと話しておられたことを思い出す。

ところで、ここに登場する焼き米であるが、新米を火で調理して作る。そして、これをまず農神さまに供えるものとする風習が、以前はよく見られたものである。

そのような信仰を背景にしてこの話を考えると、腹一杯焼き米を食べて、仕事のことはほったらかしにしてそのまま寝てしまった男は、神様からの怒りを買い、生きることを許されずに死なければならなかったのであるが、もう一人の男の方は、食べ終わった後も、元気いっぱい張り切って働いたおかげで、そのけなげさを神様の認めるところとなって、生存を許される結果となったものと思われるのであろう。

（元島根大学法文学部教授）